

上方浪曲界の大看板が目指すこと

自分も酔いしれる瞬間

「賞金が付いてるんやったらもろとこか」。昨年12月の『師走浪曲名人会(国立文楽劇場)』で京山幸枝若氏は、そう言って満場の客を笑わせた。平成23年度大阪文化祭賞の受賞をスタッフから知らされたときの話。『第53回上方演芸特選会(平成23年5月16～19日/国立文楽劇場)』で口演した左甚五郎シリーズが、“ケレン物(滑稽話)に非凡な手腕を発揮し、しかもまだこれから頂点を極める余裕すら感じさせた”と、審査員の高評を得た。

「長い芸能生活でじつに光栄なこと」という幸枝若氏は、今年でデビュー41年目。昭和46年に17歳で実父の先代(初代京山幸枝若：1926～1991)に入門し、平成16年に二代目京山幸枝若を襲名した。左甚五郎シリーズのようなケレン物もさることながら、十八番といえ、先代ゆずりの『会津の小鉄』に代表される侠客物。義理人情の心理描写や鬼気迫るシーンをドラマチックに表現するためには、なにより節(曲)が肝心で、啖呵(セリフ)に高い節が上手く乗り、客が身を乗り出す瞬間は自分も酔いしれるほどと話す。まさに浪曲の真骨頂であるが、これを上手く聴かせるのは40年を超える芸歴をもってしても難しい。だからこそやりがいがあり、それを極めることを目標にしているという。

野球のユニホームを着て口演

昭和40～50年代、関西では浪曲四天王といわれた京山幸枝若(先代)、真山一郎(初代)、春野百合子(二代目)、富士月の栄が人気の絶頂期にあった。とりわけ先代は『浪花しぐれ』『会津の小鉄』などの歌謡曲も大ヒットさせ、テレビコマーシャルにも登場するほどの人気ぶり。しかし幸枝若氏(当時は京山福太郎)は、当時こうした浪曲ブームに疑問を抱いていた。浪曲ブームではなく、幸枝若ブームではないかと。事実、昭和50～60年代にかけて笑福亭仁鶴や横山やすし・西川きよしに代表される落語や漫才の人气が高まると、若い客層から浪曲は「堅苦しい」と誤解され、敬遠されるようになった。

「あるとき梅田花月で、自分の出番に備えて浪曲のセットが準備されると、お客さんは休憩時間とばかり一斉に出て行きました。客席はガラガラで、拍手もありません」。そんな悔しさに一計を案じた幸枝若氏は、以後、自分の出番になると舞台に見台と座布団を出し、あたかも落語がはじまるように見せかけて客をつなぎとめたという。そうして落語の出囃子で登場し、座布団に座って節をほとんど入れずにケレン物をしたら、これが大いにうけた。またあるときは、野球のユニホームを着てジャイアンツの帽子を被り、手にバットを持って自作の『王貞治物語』を口演したこともあった。すべては浪曲の面白さを知ってもらいたいがためであった。

知らないとは言わせない

昭和初期、大阪には浪曲の定席が36軒あり、200人以上の浪曲師がいた。しかし、今や定席といえるのは一心寺門前浪曲寄席(天王寺区)と、みなと寄席(港区)の2軒。常時活動している浪曲師と曲師(三味線)は合わせて20人に満たない。

「(浪曲を)嫌いと言わせても、知らないとは言わせたくない」。公益社団法人浪曲親友協会会長として、新たな浪曲ファンの獲得は最大の課題だという。そのためには若手浪曲師の育成と活躍の場を増やすことが不可欠。そこで幸枝若さんは、春野恵子や幸いってん、一風亭初月、菊池まどかなどの若手浪曲師と曲師だけでユニットの結成(平成19年)を勧めたり、昨年11月には『京山幸枝若が春野恵子をシゴク会』を行い、自身は春野恵子の前に出演して若手の盛り立て役に徹するなど、かつてないケレン味の効いた取り組みを行っている。ちなみに同公演は1週間(10公演)で400人の集客があり、半数は浪曲を初めて聴く20～40代の若い客であった。また、今年の新春公演(1月4日/阿倍野区民センター)では、自ら台本を書いて若手浪曲師に漫才や音楽ショーをさせ、自身も落語『初天神』を披露。浪曲師のコミカルで多芸な一面を初めて観る人に、新鮮な驚きを与えた。その笑いの渦のなかに同席して、大阪の浪曲界が新しい時代に入りつつあることを実感した。

(ライター 三上祥弘)



二代目 京山幸枝若(きょうやま こうしわか)
昭和29年兵庫県姫路市出身。昭和46年浪曲界デビュー、同50年吉本興業所属、平成16年二代目京山幸枝若襲名。『浪花華しぐれ』『弥太っぺ情け宿』などの持ち歌も多い。公益社団法人浪曲親友協会会長。